



DOBOKU ANNIVERSARY

ほりどめ 第5回 堀留橋竣工100周年

2026年、関東大震災の復興橋梁の一つである「堀留橋」が竣工して100年となる。江戸時代から続く都市の変遷とともに歩んだ歴史を紹介する。

「堀留」の由来と移り変わる東京のまち

堀留橋は日本橋川に架かる橋の一つで、九段下駅から歩いてほど近く、九段北一丁目と西神田三丁目を結ぶ専大通りに位置する。現在の橋は1926(大正15)年に完成した鉄筋コンクリート造のアーチ橋で、「堀留」という橋名は、その場所が、江戸中期から1903(明治36)年まで外濠の堀留(堀の終点)であったことに由来する。

この周辺は、江戸・明治期の都市計画の中で大きな変遷を遂げた地域でもある。万治年間(1658~1661年)に、現在の神田三崎町にある三崎橋から靖国通り^{まじの}の俎橋^{うしはし}辺りに至る、神田川の河道の大部分が埋め立てられたが、1664(寛文4)年に俎橋から堀留橋付近まで再び掘削、舟運に利用される川が整備された。そして、明治期に堀留橋から神田川間が掘削され、日本橋と神田川が合流した。

震災復興橋梁として誕生

1923(大正12)年9月1日、関東大震災が帝都を襲った。東京市の市街地の約40%が火災で焼失し、死亡者の総計は約10万5千人にもものぼり、橋や鉄道、水道といったインフラも壊滅的な被害を受ける惨事となった。東京では震災直後から「帝都復興事業」が始まり、橋梁事業においては、交通機能が遮断されている状況から早急な復旧が求められた。さらに、耐火・耐震機能を備えた構造や都市の美観に配慮したデザインが重視された。

復興事業の対象となった東京の橋は425橋で、そのうち115橋を内務省復興局が、310橋を東京市が担い、震災復興橋梁は各地域性を踏まえたデザインで造られた。当時東京における水運の大動脈であった外濠と神田川の両運河には美しい弧を描くアーチ橋が多く

築造され、震災後には、日本橋川・神田川沿いに堀留橋^{きじ}、雉子橋、鎌倉橋、常盤橋などのアーチ橋が架けられた。

鉄筋コンクリート造の簡素ながら力強いアーチ橋である堀留橋は千代田区の景観まちづくり重要物件に登録され、震災復興橋梁の象徴として、100年が経つ今もなおその姿を後世に伝えている。



堀留橋工事 大正14.7.29 (提供：土木学会附属土木図書館)



堀留橋工事 昭和4.6.17 (提供：土木学会附属土木図書館)

参考文献

- ・松葉一清『「帝都復興史」を読む』新潮選書 2012
- ・中井裕、アーチ橋 都市空間の一部として、市街地を彩る、「東京人」,2023,461(1),p.14-19
- ・千代田区観光協会「堀留橋」(<https://visit-chiyoda.tokyo/app/spot/detail/220>)
- ・千代田区景観まちづくり重要物件「堀留橋」(<https://www.city.chiyoda.lg.jp/documents/4200/49-horitomebashi-r405.pdf>)